

降雨を祈る

干ばつになると、昔から各地で降雨のための祈願が行われてきました。資力や技術が足りない時には、祈りに救いを求めるしかなかったのかも知れません。香川県坂出市の城山神社と愛媛県松山市の阿沼美神社・伊佐爾波神社の例をご紹介します。

■城山（きやま）神社（香川県坂出市）

仁和3年（887）の干ばつに続き、翌4年も雨が少なく、田植えができずに困っていました。讃岐の国司菅原道真は城山神社に立て籠もり、七日七夜の断食で雨乞いの祈願をしたところ、満願の日になって雷鳴とともに雨が降り出し、三日三晩にわたって降り続いたと言い伝えられています。昭和14年（1939）も、7月～8月の降雨量は極端に少なく干ばつとなりました。藤岡長敏県知事は7月23日に道真公を祀る滝宮八幡宮で雨乞い祈願をし、さらに8月1日には故事にならい城山神社に参拝して降雨を祈りました。待望の雨は9月9日に降ったものの、被害は甚大でした。この干ばつを契機に、香川県は満濃池の増築、長柄ダム・内場ダムの建設などに取りかかることになりました。〈飯山町誌編さん委員会編「飯山町誌」1988年及び讃岐のため池誌編さん委員会編「讃岐のため池誌」2000年〉



■阿沼美（あぬみ）神社、伊佐爾波（いさにわ）神社（愛媛県松山市）

享保9年（1724）5月、6月は日照りのため、道前五郡のうち200町余りで植え付けができず、味酒明神（阿沼美神社）と道後八幡（伊佐爾波神社）に二度の雨乞い祈祷が命じられました。道後八幡へは諸郡より女子が出て、味酒明神には町中の女子が出て、7日間踊りました。折々降雨がありましたが、前年の冬以来雨が少なく、田掛かり水が少ないため、各地の寺社で雨乞い祈祷が行われました（御先祖由来記による）。松山藩では、この享保9年の干ばつに加えて、享保7年（1722）の洪水、享保14年（1729）の暴風雨と災害が連続し、農民の生活に余裕がなくなったことも背景となり、藩内で餓死者3,489人（垂憲録拾遺の数値）を出した享保17年（1732）の飢饉へとつながっていくこととなります。〈神原健編「愛媛県気象史料」1952年及び松山市史編集委員会編「松山市史第2巻」1993年〉

